

八丈島における明治中期の人口流出過程

奥山育子

1. はじめに

離島振興法制定後、島々は新たな局面を迎えた。特に高度成長期以降、急速に本土資本の市場と化し、その結果大都市への地迂りの人口流出を招くにいたる。しかし島のおかれた状況は、その生産様式とそれを包摂する社会の経済機構のあり方によって規定されるものであり、かつて江戸時代には帆船交通の要地として「島嶼時代」を謳歌した島々もあったのである。一般に第一次大戦¹⁾までの人口移動は島によって極めて異質的であったとされているが、その時期の人口移動の諸様相を明らかにした研究例は従来必ずしも多くを見ない。

筆者の調査対象とした八丈島は黒潮本流により本土と隔てられ、また江戸時代には流刑地として位置づけられたため、いわゆる島嶼時代には無縁な、最も孤立性の強い島の一つであった。しかし明治中期以降、著しい人口流出を示し、その方向・性格が概ね植民地を中心とする南方島嶼群への製糖業従事の農業開拓移住であったことを顕著な特徴とする。本稿ではその嚆矢であり、一連の人口流出に様々な側面から多大な影響を及ぼした、明治中期の小笠原開拓移住の過程を中心に述べてみたい。

2. 江戸時代～明治初期の動向

江戸時代の八丈島はまさに孤島苦の辛酸をなめ恒常的飢餓の状態であった。浸食の進んだ東山の肥沃な保水性に富む土壌は、伊豆諸島中では比較的高い農業生産性を可能にしたが、流人の受入れ、厳しい出島禁止策等から、近世には過剰人口を抱えるに至った。大島を始め、島々では元禄の頃より既に江戸との頻繁な交流・人口移動がみられたが、八丈では明和年間に出島禁止策が緩和されるものの、その圏外におかれていたといえる。一方、

島に滞留する過剰人口緩和のため、江戸への奉公の許可の他、安永元年から農業開拓移住である「出百姓」が開始された。その対象は二・三男を中心にした無株・小株の極貧層であり、島の中でも生産性の低い坂上（榎立・中之郷・末吉）から多く出た。時として重立層に引率られ家族で移住したが、廃村・荒蕪地の開拓に従事する他なく、後に続く者はあまり出なかった。更に文久2年、領土保全の見地から、幕府は小笠原諸島（当時邦人はいなかった）の開拓を八丈島民38名をして着手させた。この時は内外情勢が急を告げ、1年で強制引揚げを余儀なくされたが、明治中期以降の開拓の先鞭をつけたのである。

維新後も急激な変化はみなかったと思われるが、明治初期の人口流出の状況をみておこう。資料は三根村の管外寄留人名簿で、明治4～6年のある年の資料と考えられる³⁾。これには45名の記載があり、商用等を除くと38名が出稼ぎ者（全て男子）で、船乗出稼11名、後は東京（霊岸島、本湊町等）である。出稼者は比較的大家族の二・三男が圧倒的であるが、一般に明治初期は各村とも多くの流出はみていなかった。

3. 明治中期の動向

明治中期に入ると、島民の出島先として小笠原が顕著となっていく。文久の放棄の後、再び開拓が本格化するのには明治14年以後であるが、八丈島民の流入を多く見るのは、20年、八丈寄港の定期航路の開業に伴うと考えられる。以後八丈では全島の傾向として小笠原への流出が相つぎ、砂糖のモノカルチャーの島の中核となっていく。

ここでは三根村の旅行・出寄留届綴から、比較的保存状態のよい明治23、27、32年の例を第1表にあげた。23年では東京へ出島する者の目的の見物・商用に対し、小笠原への出稼的性格がみえる

表1 三根村 出寄留・旅行先

先行	戸主	長男	2・3男			弟	娘	その他		夫婦	計
			男	女	男			女			
明治23年	小笠原	5	1					1	2		9
	C										
	小笠原	6		1	3	1		5	1	2(6)	23
	母島	C2A		A		A		2B	C	A	
	東京	11	2	2	3	3		2	3(4)	1(2)	29
明治27年	3D		D						D		
	その他	4									4
	4D										
計	26	3	3	6	4		8	6(7)	3(8)	65	
明治27年	小笠原	1	1	1				1	2		6
	A							A	C		
	父島	3	2	1	3	1	3				13
	2A		A	A	2A	A	2A				
	母島	12	7	2	7	8	6	5	3(7)		54
明治32年	6A		6A	A	2A	2A	A	2A	A B		
	東京	2			1			1	2(5)		10
	C								C		
鳥島									1(2)	2	
その他		1								1	
計	15	12	5	9	11	9	11	6(14)		86	
明治32年	母島	1			1	5	1	1	5(20)		29
	父島	1		3	1	3	1		3(11)		20
	大島	1						1	2(4)		6
	三宅島							1			1
	新島							1※			1
	鳥島	1								1(6)	7
	北海道									1(4)	4
	東京	1	1				2	1	1(6)		11
その他		1	1						1(2)	4	
計	5	2	4	2	8	6	3	14(53)		83	

凡例：A出稼 B寄留 C商用 D見物
 注1) 夫婦の場合、夫婦数を表わし、()内に子供も含んだ人数を示した。合計では人数で算出してある。
 2) M23のその他は「日本内地漫遊80日」。
 3) M23, 27の「小笠原」は小笠原とのみ記載のあったもの。
 4) M32の※は三宅島と同一人物。

表2-1 小笠原移住者戸主(明治23~34年)

続柄	転籍時 年齢	19歳	20~29	30~39	40~49	50~59	60歳	計
		以下					以上	
三根村	長男	2	15	12	5	4		38
	二三男		3	8	2	1		14
	婿養子		3	5	1	1		10
	不明		1	1				2
	その他				2			2
計		2	22	26	10	6	—	66
榎立村	長男	1	11	3	5	6	1	27
	二三男	1	3	5	4	1		14
	婿養子		2	4				6
	その他		3					3
計		2	19	12	9	7	1	50

表2-2 家族構成員別戸数

	単身	1	2	3	4	5	6	7	8	9~	計
三根村	1	6	10	1	15	10	4	4	5	10	66
榎立村	3	2	5	13	6	6	3	3	3	6	50

表2-3 家族構成別戸数

	S	N	NPかNB	NPB	NPBE	計
三根村	1	20	9	8	28	66
榎立村	3	16	7	11	13	50

凡例：S：単身 N：核家族 P：親 B：兄弟 E：その他

が、27年にはこの傾向が顕著に出ている。戸主・長男層の出稼の他、女子の比重も高い。これは当時の小笠原の原始的製糖法が、畜力と人力による圧搾方法を取り、女子労働力の需要が高かったためである。32年には北海道への出島もみられるが、概して伊豆諸島内への移動はごく稀である。

一方27年の出島者を、28年の地租島村費徴収名簿で照合すると、東京への出島者は最上層を含む上層から、小笠原への出島者はそれに比すれば下層に傾いて(極貧層主体とはいえない)出ている。東京は元来縁故・近接感に乏しく、当時の八丈にとっての労働力吸引先ではなくなっており、糖業に多くの労働力を必要とした小笠原が専ら吸引地となっていた。

これに対し完全に移住した場合を、転籍届綴から、第2表にのせた。短期間に多くの家ぐるみ流

図1 明治23年転籍者土地所有変化

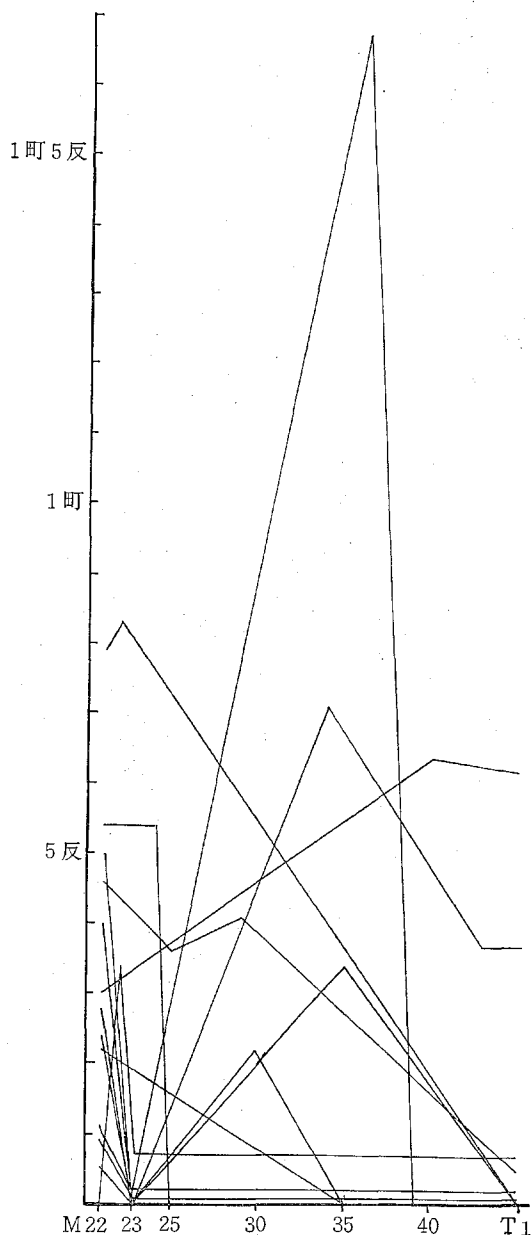
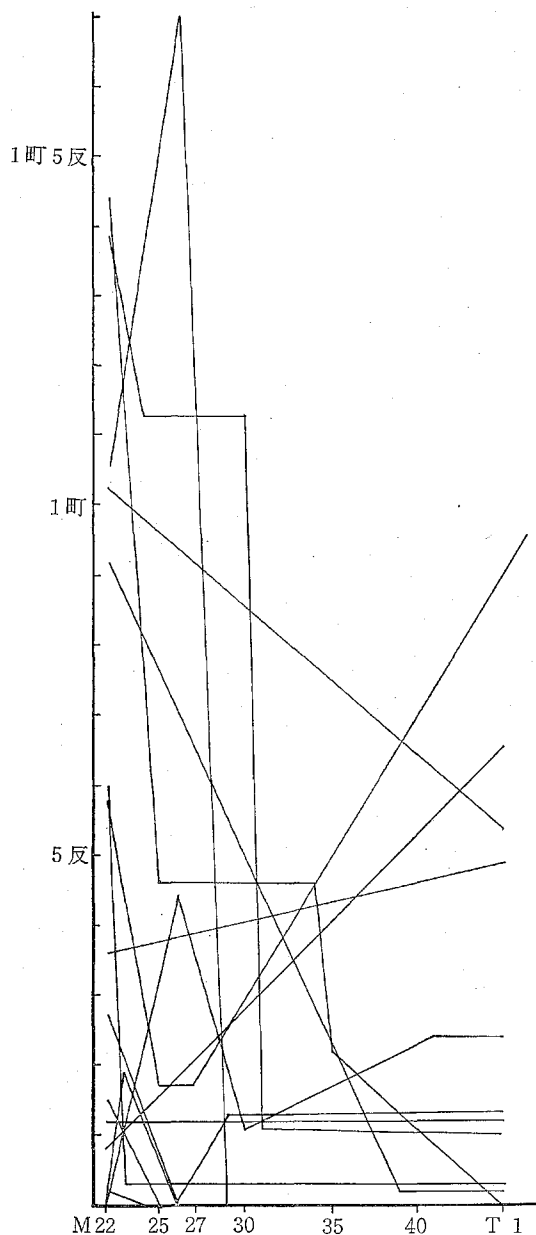


図2 明治27年転籍者土地所有変化



出を認めうるが、比較的若い層の、分家戸主より直系戸主を中心にしていたことがわかる。三根村の例を転籍年、もしくは前年の地租島村費徴収簿でみると、先に述べた小笠原への出島者より、転籍者の方がやや下層に多いものの、中・上層からも相当数出ている。この点、昭和恐慌後の南洋出島者とは出身階層を異にしている。家族数では、

必ずしも同世帯とは限らず、全員離村したともいえないが、戸主夫婦に両親兄弟も含む家が比較的多い。一方移主にあたり土地をどのように処分したかを、榎立村の反別帳（M22調製）から照合・集計したのが、図1、2である。22年時に所有していた土地と転籍時までの変化、更に転籍後の土地移動を示した。転籍後については移動が多く、

各戸、各年次毎の集計は今回できなかったため、土地を購入した最後の年に、その年迄に購入した合計面積を示し、更に大正元年における所有面積を算出した。23年にはほとんどが、転籍時に土地を処分している。なお榎立村では3反未満層で全体の4割を占める。27年にはより上層出身者が多くなり、彼らは転籍時に土地を残していく余裕がある。更に比較的下層でも転籍後土地を購入している者も多い。土地所有関係の資料は得られなかったが、大正の終りでも小作農家率は1割に満たず、明治中期迄に農民層分解が進行したとは考えにくいので、自作・自小作を中心にしたものである。

この様に多くの移住の結果、大正期の小笠原人口の7割は八丈出身者といわれている。先にみた土地的つながりの他、婚姻・出稼等を通じ人的交流もみられ母村との関係は比較的密であった。小笠原が特に大正9年の糖価暴落から不況に陥ったさい、帰村した者もみられたのである。また小笠原での徒手空拳からの成功は八丈島民に移民熱を引きおこし、小笠原を足がかりに南大東島、南・北米、南洋群島へ移住した者を多数みることになった。

4. 人口流出の背景

かくも多くの流出を引きおこした背景は何であったか。八丈島の伝統的生業としては、根栽型焼畑による自給的農業と、絹年貢の島として黄八丈⁵⁾の織立てがあげられる。漁業的發展の契機を欠いていたため、この形態は明治中期迄は保持されていたが、極めて零細・前近代的生産様式にとどまっていた。土地の偏在はみられたが農民層分解は極めて遅く、零細な自作農を中心としていた。黄八丈・生糸も比較的安定していたといえる。この

点日露戦争後、特に大正期の慢性的不況・恐慌下で養蚕・酪農業が打撃をうけ、昭和恐慌後は農民層の急速な分解と、格差の増大を招いたのに比して、対照的である。この時期、経済的背景を示す資料は極めて乏しく、今後検討を要するが、明治中期の小笠原開拓移住は、必ずしも経済的困窮・逼迫から必然的に行われたとはいえない。それがまた先に述べた出身階層に反映すると考えうる。

一般に「全家離村農家こそ家族員の比較的少数なる貧農の生活破綻者であり極貧農の農業からの顛落者⁶⁾」(傍点原文)であるといわれているが、以上見てきた事例は明らかに様相を異にしている。その背景は様々に考えられるが、筆者は八丈における家のあり方をあげてみたい。絶海の孤島として世代階層制村落の特質を濃厚に保持してきた八丈島においては、本土の同族階層制村落にみられる父系単系集団成立の契機を欠き、双系的出自規制と家の分節化を特徴とする。このため同族階層制村落において家を村に緊縛するところの「家」観念が本来欠如していると考えられる。このことが、島での生活程度に必ずしもかわらず、高い移動性を生む一因となったのであろう。

注

- 1) 2) 河地貫一(1966): 離島の人口移動『経営と経済』104, 105
- 3) 年不詳であるが、資料に記されている足柄県下三根村の記載から推察、八丈が足柄県下にあったのは明治4~6年である。
- 4) 転籍届がまとまって出、比較的信頼しうと思われる明治23~34年までをとった。
- 5) 黄・樺・黒の草木染めを特徴とする。
- 6) 野尻重雄(1942): 『農民離村の実証的研究』
- 7) 詳しくは蒲生・坪井・村武(1975): 『伊豆諸島』参照。

(昭59 院)

Migration Process in Middle Period of Meiji in the
Hachijo Island
Ikuko OKUYAMA